日本美術史講義７ｂ

2021年秋学期　火曜4限

担当：伊藤　大輔

第11回

【注意】

このパワーポイントスライドは、本講義の**受講者専用**です。

許可無く、複製・公開すること、あるいは知り合いや友人へ転送することは**禁じます**。個人の学習のみに使用して下さい。

違反しますと、**作品の所有者、写真の撮影者、写真の出版元**等の**権利者**とトラブルになる可能性があります。

トラブルを避け、自分の身を守るという観点から、制限にご協力下さい。

はじめに

今回は、前回から引き続き、法華堂根本曼荼羅を巡る美術史的諸問題について考察し、次に正倉院の絵画について学んでゆきます。

まず最初に、この作品の制作年代について検討を加えます。

①法華堂根本曼荼羅

【承前】

（６）制作年代の考察

１．敦煌壁画との比較

・敦煌壁画との比較では、698年の第332窟「釈迦霊鷲山説法図」（前出）に基本構造が近い。

・しかし、「法華堂根本曼荼羅」はより表現が洗練されているので、8世紀初頭の開元期（713~742）の唐の画風を反映していると推定される。

敦煌・第332窟東壁「釈迦霊鷲山説法図」

中国石窟敦煌莫高窟1~5（平凡社）敦煌文物研究所、1992

①法華堂根本曼荼羅

２．日本では、およそ750~60年代の、造東大寺司（ぞうとうだいじし）関係で制作された作品に近いとされる。

※造東大寺司は、東大寺の造営や大仏の制作、写経事業など、東大寺関係の工務を行う部署。748年～789年の間存続。

①法華堂根本曼荼羅

〔1〕天平勝宝四年（752）開眼供養の東大寺大仏の蓮弁線刻画とは中尊の姿が共通する。

在外日本の至宝１仏教絵画（毎日新聞社）柳澤孝ほか、1980

六大寺大観　東大寺（岩波書店）奈良六大寺大観刊行会、2001

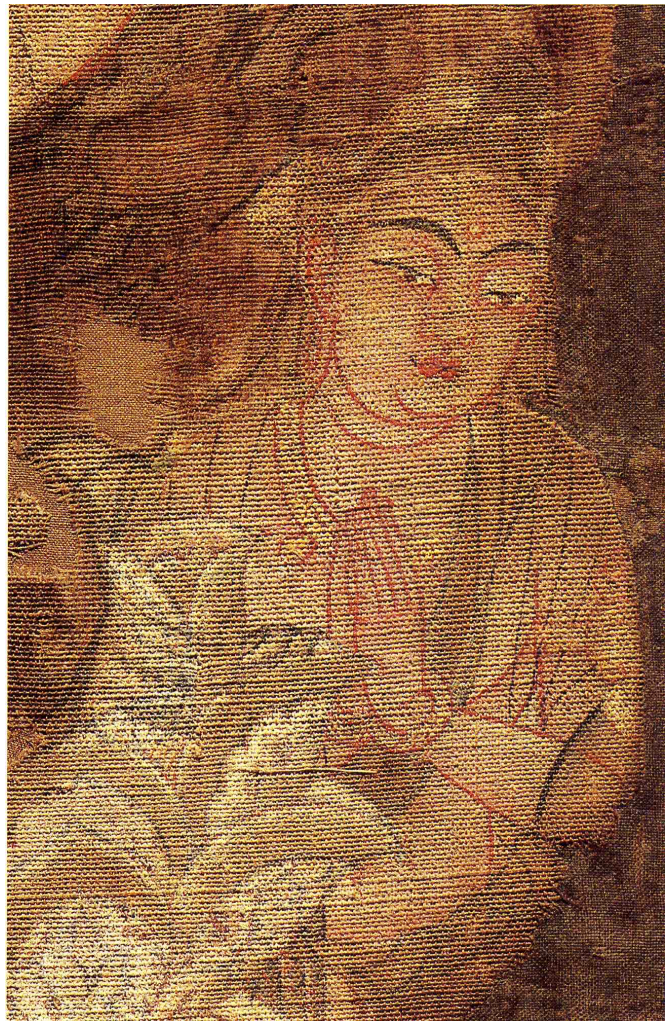
丸顔で肩幅の広い量感豊かな体躯が似る。

東大寺大仏蓮弁線刻画

①法華堂根本曼荼羅

〔2〕天平勝宝七年（755）の華厳経厨子扉絵を写した白描図像（左写真）とは、菩薩の容姿や瓔珞の形式、半透明な天衣などが類似する。

図版削除



在外日本の至宝１仏教絵画（毎日新聞社）柳澤孝ほか、1980

①法華堂根本曼荼羅

〔3〕天平宝字七、八年（763、764）頃の栄山寺八角堂壁画では、
菩薩の面差しや瓔珞等に共通性が見られる。

図版削除

図版削除

栄山寺八角堂「奏楽菩薩」

法華堂根本曼荼羅の菩薩

在外日本の至宝１仏教絵画（毎日新聞社）柳澤孝ほか、1980

①法華堂根本曼荼羅

〔4〕技法上は、「吉祥天画像」（薬師寺）と密接な関係にある。

・麻布を用い、鉛白に朱を混ぜた顔料で、肉身の色や淡紅色の隈取りを表現する点が共通。

・鉛白に赤色有機顔料を混ぜて紫を発色させる技法も共通。

「吉祥天画像」は、770年頃の作品であり、「法華堂根本曼荼羅」の制作時期の下限の目安となる可能性が高いとされる。

①法華堂根本曼荼羅

「吉祥天画像」（薬師寺）

肌の色合い

麻布の織目　　紫の発色

国宝「吉祥天像」図録（東京国立博物館）、2004

①法華堂根本曼荼羅

（７）制作目的について

１．通説では、

東大寺で毎年、3月16日に行われる法華会の本尊画像であると見る。

法華会は、天平十八年（746）3月に良弁（ろうべん）により開始された法会であり、推定制作年代とも近接する。

①法華堂根本曼荼羅

２．新説では、（川村知行「法華堂根本曼荼羅と東大寺法華会」、『論叢仏教美術史』、吉川弘文館、1986年）

「法華堂根本曼荼羅」は、法華会に用いられたのではあるが、法華会の性格の変化に従って、制作されたとする。

・法華会は当初は、法華経の研学講讃のための会であったが、良弁の死後（774年没）は、創始者の良弁の追善供養を目的とするようになった。

①法華堂根本曼荼羅

・ところで、東大寺では、法会に際して、関係する有力者の菩提を弔うために曼荼羅をかける風習があった。

《例1》毎年3月14日に催行の華厳会では、大仏殿の東西に不空羂索観音と観音の刺繍の曼荼羅が掛けられたが、それぞれ東大寺の本願である、聖武天皇と光明皇后の菩提を弔う意味が籠められていたことが、縁に記された銘文に書かれていた。（『七大寺巡礼私記』、『東大寺要録』）。

①法華堂根本曼荼羅

《例2》東大寺の上如法院で春秋二回行われた「如法堂御斎会」では、光明皇后の菩提供養を目的とした「霊鷲山浄土図」二鋪が掛けられていた。

以上のような事例を踏まえると、同じ「霊鷲山浄土図」である「法華堂根本曼荼羅」も、法華会において良弁の追善供養を目的としていた可能性が高いと考えられる。

①法華堂根本曼荼羅

以上の諸論点を踏まえると、「法華堂根本曼荼羅」の制作年代は、様式上、およそ750～60年代と考えられる。

但し、最後に紹介した川村智行氏の議論に従えば、制作はやや遅くなり、良弁の没した774年以降ということになる。

【以上で「法華堂根本曼荼羅」については終了します】
【引き続き、正倉院の絵画について見てゆきます】

②正倉院の絵画

（１）正倉院の由緒

１．聖武天皇崩御の後、四十九日に、光明皇后が先帝遺愛の国家の珍宝をまとめて、東大寺の盧舎那仏に献納したのが始まり。

日本美術全集３　東大寺・正倉院と興福寺（小学館）監／浅井和春、2013

②正倉院の絵画

（２）正倉院の構成

校倉造の南北両倉を板倉造の中倉がつなぐ三倉接続連屋の形をとる。

南倉　中倉　北倉

【参考】実際のスケール感

日本美術全集３　東大寺・正倉院と興福寺（小学館）監／浅井和春、2013

②正倉院の絵画

【構造】

高床式の双倉（ならびくら）の中間開口部にも、板壁を張り、三倉連接式にしている。

上図：平沢官衙の双倉

こちらは、左右の倉が土壁になっている。

図版削除

日本美術全集３　東大寺・正倉院と興福寺（小学館）監／浅井和春、2013

②正倉院の絵画

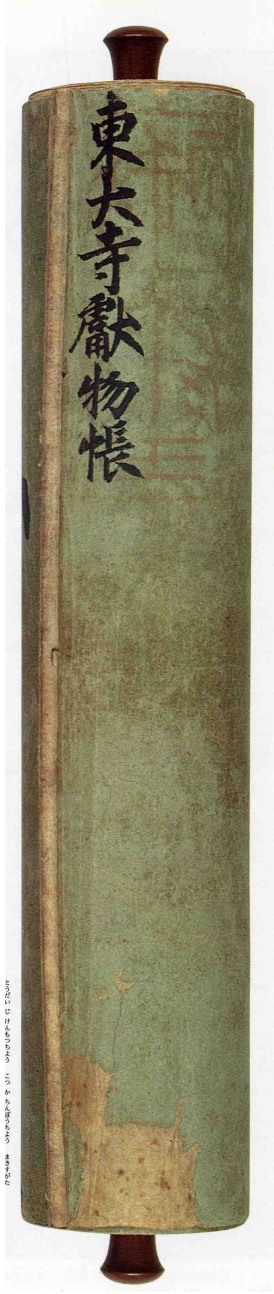
次に、三倉（北倉・南倉・中倉）それぞれの役割や収納品の特徴について見てゆきます。

②正倉院の絵画

1．北倉

光明皇后が東大寺大仏に献納した宝物を収蔵。

「東大寺献物帳」五巻という、奉納された宝物の目録が残されており、奉納物の品目が分かる。



「東大寺献物帳」

正倉院宝物　北倉Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（毎日新聞社）
正倉院事務所（宮内庁）、1994, 1995, 1996

②正倉院の絵画

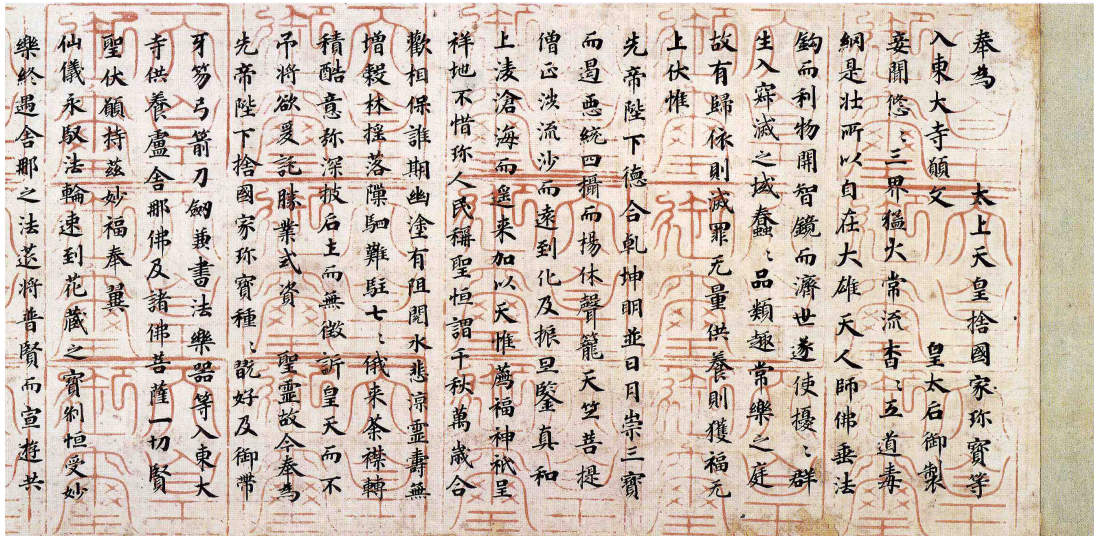
【5種の献物帳】

〔1〕「国家珍宝帳」

天平勝宝八歳（756）6月21日

聖武天皇遺愛の品々の目録

……



「国家珍宝帳」

正倉院宝物　北倉Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（毎日新聞社）正倉院事務所（宮内庁）、1994, 1995, 1996

②正倉院の絵画

〔2〕「種々薬帳」

天平勝宝八歳（756）6月21日

光明皇后が奉献した薬物60種の目録。

実際に使うことが許されていた。

「種々薬帳」

正倉院宝物　北倉Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（毎日新聞社）正倉院事務所（宮内庁）、1994, 1995, 1996

②正倉院の絵画

〔3〕「屏風花氈等帳」

天平勝宝八歳（756）7月26日

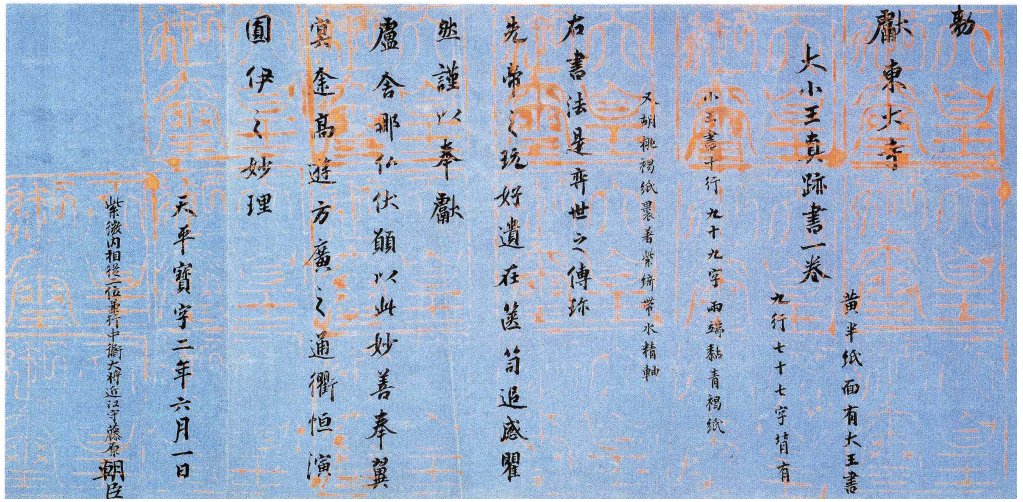
光明皇后による追加調査で発見された屏風・花氈等の奉納物の目録

※花氈～花柄等の文様入りの毛氈

〔4〕「大小王真跡帳」

天平宝字二年（758）6月1日

名筆として知られる王羲之・王献之の書跡を奉納した目録。



「大小王真跡帳」

正倉院宝物　北倉Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（毎日新聞社）正倉院事務所（宮内庁）、1994, 1995, 1996

②正倉院の絵画

〔5〕「藤原公真跡屏風帳」

天平宝治二年（758）10月1日

光明皇后の亡父、藤原不比等の追善のため、不比等の真跡屏風二帖が奉献された。

※北倉は、天皇の財物として朝廷が管理する「勅封倉」として扱われる。

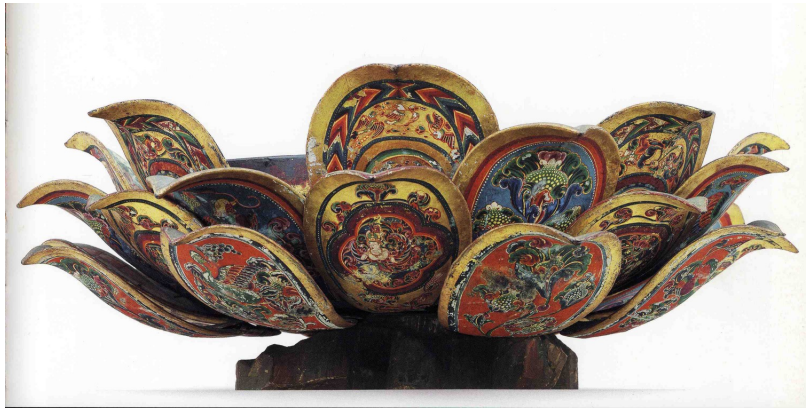
②正倉院の絵画

2．南倉

天平勝宝四年（752）4月9日の東大寺大仏開眼会の際に使用した調度や器物を収蔵。

また、天暦四年（950）、東大寺羂索院の双倉が破損した際に、そこに収められていた仏具・什器等も移納され、以後それらも正倉院宝物として伝来した。

※東大寺の僧綱が管理する「綱封倉」（ごうふうくら）である。



南倉「香印座」

正倉院宝物　北倉Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（毎日新聞社）正倉院事務所（宮内庁）、1994, 1995, 1996

②正倉院の絵画

３．中倉

東大寺の儀式関係品、東大寺の文書や記録、造東大寺司関係の物品が収められる。

中倉「粉地彩絵八角几」

正倉院宝物　北倉Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（毎日新聞社）正倉院事務所（宮内庁）、1994, 1995, 1996

今回の講義はここまでです。次回から、正倉院の個別作品について見てゆきます。